

グループ別ディスカッションでの意見・提案

AからGの7つのグループに分かれて、「どう取り組む！ごみゼロ社会」というテーマでディスカッションしたあと、各グループで取りまとめた意見・提案を発表し合いました。

【グループA】

住民への意識付けどうしていくのかについて考えた。まず、こどものときからの教育が大切。学校教育の中で実践していくことが必要。ごみの集積所をきれいにすることも効果的。新聞、ラジオをつかって啓発することが重要。

継続するにはどうしていくのかについて考えた。活動を5～6年続けている人たちに対して、行政側はきちんと評価（目配り、気配り）をお願いしたい。リーダーシップを持った地域の人材が必要。行政も人材育成を。活動におけるメンバー一人一人の負担を軽減することが重要。行政主体だとやらされている感覚になるので、市民主体の活動が望ましい。

ペットや缶を洗って出さない人がいるが、網袋にすると汚くなるので市民の意識付けの効果があるのではないか。

行政が生ごみ処理機の購入助成を行っているケースがあるが、ほとんどの方が使っていないようだ。行政は実態を把握し、使い方をきめ細やかに指導するなどフォローすべき。

【グループB】

山間部の地域では、生ごみを有効利用している。他の地域でもグループ単位で取り組んでもらったらどうか。

分別の徹底が基本。新市ではバラバラである。分別収集をきちっとやる必要があるが、分別を統一してごみゼロを目指すべき。

過剰包装について、簡単になくすと言っても難しく、行政などが対策講じるべき。

小さい力を大きな原動力にして、持続可能なごみの分別収集の仕組みをつくる必要がある。

【グループC】

ごみ減量化に向けて家庭でできることを考えたとき、食べ物に関して子供のしつけをしっかりすることが大切。

地域や学校での環境教育が重要。しかし、今の大人や教育者が次世代に教えられるのかという問題がある。

過剰包装をやめる、トレーを減らす、ペットボトルを再利用する、といった方向で取り組む必要がある。

マイバッグの持参を促進するべき。

家電製品など新製品が次から次へと出てきて消費者の購買意欲をそそるが、ごみを減らすにはこうした仕組みを変えていかないといけないと思う。

ごみに関して個人の認識を深めることが重要。分かっている人が発信していくべき。

資源が底をつき欠けていることを認識すべき。

このような機会を継続して行ってほしい。ぜひ第2回の開催をお願いしたい。

【グループD】

容器包装ごみを減らすことが重要。分別の徹底が基本。

生ごみ堆肥化について二次処理施設の整備をどうするのか。例えば、行政、市民、事業者のどの主体が整備するのか考える必要がある。

生ごみ堆肥化を進めるにあたっては、住民の理解をどう得るのが大切。

生ごみ堆肥化について松阪市では、行政のシステムがある地域や市民グループ主体の取組に任せている地域など、旧市町の単位で実情が異なるが、生ごみ堆肥化のモデルが既にできている。平等にごみ処理を行うとする必要はなく、地域によって異なっても良いのではないかと。松阪市は、そうした視点から既にあるモデルを参考に生ごみ堆肥化も含めて将来の市のごみ処理システムのあり方を考えるべき。

ごみゼロに向けた啓発・実践をもっと進めなければいけない。

【グループE】

生ごみ堆肥化グループの活動を広げていくためには、ごみに付加価値を付けることを考えるなど発想の転換が必要。また、市民主体の堆肥化活動は、小さなグループ単位で行い、横の連携を取るのが理想。

不法投棄の防止などもっと考える必要がある。

【グループF】

スーパー過剰包装止めて欲しい。化粧品等詰め替え製品。トレー必要か。

学校教育の中でもっと環境教育に取り組む必要がある。例えば、総合学習などの時間に地域で活動している人を招き、環境やごみのことについて話してもらってはどうか。

合併後においても旧市町単位で分別がまちまちであり、統一して欲しい。

生ごみの水切りが大切である。

ごみの収集日が多いと市民はごみを出しやすくなり、ごみの量は減らない(少ない場合よりかえって増える)。収集日を減らすなど、市民に対して厳しくすることも必要である。行政資料は必要なだけ配布し、不用な配布は控えるべき。

【グループG】

生ごみの水切りをもっと促進する必要がある。

過剰包装の拒否、マイバッグ持参などを実行する。行政と事業者でもっと話し合いを。

食事をつくりすぎない。食べてから買い物に行くと余分に買わなくなり良いかもしれない。

ごみの分別について、合併前市町村のままであり不公平感がある。

(文責 三重県ごみゼロ推進室)